

# 竹青

——新曲聊齋志異——

太宰治

青空文庫



むかし湖南こなんの何とやら郡邑ぐんゆうに、魚容という名の貧書生がいた。
 どういうわけか、昔から書生は貧という事にきまつているようである。この魚容君など、氏育うじち共に賤いやしくなく、眉目清びもく秀、容姿
 また閑雅かんがの趣おもむきがあつて、書を好むこと色を好むが如ごとしとは言え
 ないまでも、とにかく幼少の頃より神妙に学に志して、これぞと
 いう道にはずれた振舞いも無かつた人であるが、どういふわけか、
 福運には恵まれなかつた。早く父母に死別し、親戚しんせきの家を転々
 して育つて、自分の財産というものも、その間に綺麗きれいさつぱり無
 くなつていて、いまは親戚一同から厄介やっかいもの者の扱あつかいを受け、ひと
 りの酒くらの伯父おじが、醉余すいよの興きようにその家の色黒く瘦やせこけた無

学の下婢かひをこの魚容に押しつけ、結婚せよ、よい縁だ、と傍若無人に勝手にきめて、魚容は大いに迷惑ではあったが、この伯父もまた育ての親のひとりであつて、謂いわば海山の大恩人に違ひないのであるから、その酔漢の無礼な思いつきに対して怒る事も出来ず、涙を泳こらえ、うつろな気持で自分より二つ年上のその痩せてひからびた醜い女をめとつたのである。女は酒くらしいの伯父の妾めかけであつたという噂うわさもあり、顔も醜いが、心もあまり結構でなかつた。魚容の学問を頭から軽蔑して、魚容が「大学の道は至善とどまに止るに在あり」などと口ずさむのを聞いて、ふんと鼻で笑い、「そんな至善なんてものに止るよりは、お金に止つて、おいしい御馳走ごちそうに止る工夫でもする事だ」とにくにくしげに言つて、「あなた、すみ

ませんが、これをみな洗濯して下さいな。少しは家事の手助けもするものです」と魚容の顔をめぐがけて女のごれ物を投げつける。魚容はそのよごれ物をかかえて裏の河原におもむき、「馬嘶いななきて白日暮れ、劍鳴て秋氣来る」と小声で吟じ、さて、何の面白い事もなく、わが故土こかくにいなながらも天涯の孤客こかくの如く、心は渺びようとして空しく河上を徘徊はいかいするという間の抜けた有様であつた。

「いつまでもこのような惨めみじな暮しを続けていては、わが立派な祖先に対しても申しわけが無い。乃公おれもそろそろ三十、而立じりつの秋だ。よし、ここは、一奮発して、大いなる声名を得なければならぬ」と決意して、まず女房を一つ殴なぐつて家を飛び出し、満々たる自信もつを以て郷試きょうしに応じたが、如何いかにせん永い貧乏暮しのために

腹中に力無く、しどろもどろの答案しか書けなかつたので、見事に落第。とぼとぼと、また故郷のあばら屋に帰る途中の、悲しさは比類が無い。おまけに腹がへつて、どうにも足がすすまなくなつて、洞庭湖畔の呉王廟の廊下に這い上つて、ごろりと仰あおむ向けに寝ころび、「あああ、この世とは、ただ人を無意味に苦しめるだけのところだ。乃公の如きは幼少の頃より、もつぱら其その独ひとりを慎んで古聖賢の道を究きわめ、学んで而して時に之これを習つても、遠方から福音の訪れ来る気配はさらに無く、毎日毎日、忍び難い侮辱ばかり受けて、大勇猛心を起して郷試に応じても無慙むざんの失敗をするし、この世には鉄面皮の悪人ばかり栄えて、乃公の如き気の弱い貧書生は永遠の敗者として嘲笑せられるだけのものか。女

房をぶん殴つて颯爽さつそうと家を出たところまではよかつたが、試験に落第して帰つたのでは、どんなに強く女房に罵倒ばとうせられるかわからない。ああ、いつそ死にたい」と極度の疲労のため精神朦朧もうろうとなり、君子の道を学んだ者にも似合わず、しきりに世を呪のろい、わが身の不幸を嘆いて、薄目をあいて空飛ぶ鳥の大群を見上げ、「からすには、貧富が無くて、仕合せだなあ。」と小声で言つて、眼を閉じた。

この湖畔の呉王廟は、三国時代の呉の將軍甘寧かんねいを呉王と尊称し、之を水路の守護神としてあがめ祀まつつていゝるもので、靈顯すこぶるあらたかの由、湖上往来の舟がこの廟前を過ぐる時には、舟か子ども必ず礼拝し、廟の傍の林には数百の鳥が棲息せいそくしていて、

舟を見つけると一斉に飛び立ち、啞々<sup>あゐ</sup>とやかましく噪<sup>さわ</sup>いで舟の帆柱に戯れ舞い、舟子どもは之を王の使いの鳥として敬愛し、羊の肉片など投げてやるとさつと飛んで来て口に啞<sup>くわ</sup>え、千に一つも受け損ずる事は無い。落第書生の魚容は、この使い鳥の群が、嬉々<sup>きき</sup>として大空を飛び廻っている様をうらやましがり、鳥は仕合せだなあ、と哀れな細い声で呟<sup>つぶや</sup>いて眠るともなく、うとうとしたが、その時、「もし、もし。」と黒衣の男にゆり起されたのである。

魚容は未だ夢心地で、

「ああ、すみません。叱<sup>しか</sup>らないで下さい。あやしい者ではありません。もう少しここに寝かせて置いて下さい。どうか、叱<sup>しか</sup>らないで下さい。」と小さい時からただ人に叱<sup>しか</sup>られて育つて来たので、

人を見ると自分を叱るのではないかと怯<sup>おび</sup>える卑屈な癖が身についていて、この時も、うわごと 謔言のように「すみません」を連発しながら寝返りを打って、また眼をつぶる。

「叱るのではない。」とその黒衣の男は、不思議な唼<sup>しわが</sup>れたる声で言つて、「呉王さまのお言いつけだ。そんなに人の世がいやになつて、からすの生涯がうらやましかつたら、ちようどよい。いま黒衣隊が一卒欠けているから、その補充にお前を採用してあげるといふお言葉だ。早くこの黒衣を着なさい。」ふわりと薄い黒衣を、寝ている魚容にかぶせた。

たちまち、魚容は雄<sup>おす</sup>の鳥。眼をぱちぱちさせて起き上り、ちよんと廊下の欄干<sup>らんかん</sup>にとまつて、くちばし 嘴で羽をかいつくろい、翼をひろ

げて危げに飛び立ち、いましも斜陽を一ぱい帆に浴びて湖畔を通  
 る舟の上に、むらがり噪いで肉片の饗きよう応おうにあずかつている数  
 百の神鳥しんうにまじって、右往左往し、舟子の投げ上げる肉片を上じよう  
 手ずに嘴くちばしに受けて、すぐにもう、生れてはじめてと思われるほど  
 の満腹感を覚え、岸の林に引上げて来て、梢こずえにとまり、林に嘴を  
 こすつて、水満々の洞庭の湖面の夕日に映えて黄金色に輝いてい  
 る様を見渡し、「秋風ひるがえ翻ひるがえす黄金浪花千片か」などと所い謂わ君子蕩と  
うとうぜん々然ぜんとうそぶいていると、

「あなた、」と艶えんなる女性の声がして、「お気に召しまして？」  
 見ると、自分と同じ枝に雌めすの鳥が一羽とまっている。

「おそれいります。」魚容いちゆうは一揖いっしやくして、「何せどうも、身は軽

くして泥滓でいしを離れたのですからなあ。叱らないで下さいよ。」と  
つい口癖になつていたので、余計な一言を附加えた。

「存じて居ります。」と雌の鳥は落ちついて、「ずいぶんいまま  
で、御苦労をなさいましたそうですね。お察し申しますわ。  
でも、もう、これからは大丈夫。あたしがついていきますわ。」

「失礼ですが、あなたは、どなたです。」

「あら、あたしは、ただ、あなたのお傍に。どんな用でも言いつ  
けて下さいまし。あたしは、何でも致します。そう思つていらし  
て下さい。おいや？」

「いやじゃないが、」魚容は狼狽ろうばいして、「乃公おれにはちやんと女  
房があります。浮気は君子の慎しむところです。あなたは、乃公

を邪道に誘惑しようとしている。」と無理に分別顔を装うて言った。

「ひどいわ。あたしが軽はずみの好色の念からあなたに言い寄つたでもお思いなの？ ひどいわ。これはみな呉王さまの情深いお取りはからいですわ。あなたをお慰め申すように、あたしは呉王さまから言いつかつたのよ。あなたはもう、人間でないのですから、人間界の奥さんの事なんか忘れてしまってもいいのよ。あなたの奥さんはずいぶんお優しいお方かも知れないけれど、あたしだってそれに負けずに、一生懸命あなたのお世話をしますわ。烏みさおの操は、人間の操よりも、もつと正しいという事をお見せしてあげますから、おいやでしょうけれど、これから、あたしをお傍

に置いて下さいな。あたしの名前は、竹青というの。」

魚容は情に感じて、

「ありがとう。乃公も実は人間界でさんざんの目に遭あつて来ているので、どうも疑い深くなって、あなたの御親切も素直に受取る事が出来なかつたのです。ごめんなさい。」

「あら、そんなに改まつた言い方をしては、おかしいわ。きょうから、あたしはあなたの召使いじゃないの。それでは旦那だんな様、ちよつと食後の御散歩は、いかがでしょう。」

「うむ、」と魚容もいまは鷹揚おうようにうなずき、「案内たのむ。」  
「それでは、ついていらつしやい。」とぱつと飛び立つ。

秋風じゅうふう 颯々しやうしやうと翼を撫なで、洞庭の烟波えんぱ眼下がんげにあり、はるかに望

めば岳陽の蕙いらか、灼しゃく爛らんと落日に燃え、さらに眼を転ずれば、君  
 山、玉鏡に可憐かれん一点の翠黛すいたいを描いて湘しょうくん君おもかげの涕なみだをしのぼしめ、  
 黒衣の新夫婦は唾あ々と鳴きかわして先になり後になり憂うれえず惑わ  
 ず懼おそれず心のままに飛ひ翔しょうして、疲れると帰帆しようじようの檣じよう上じようになら  
 んで止つて翼を休め、顔を見合わせて微笑ほほえみ、やがて日が暮れる  
 と洞庭秋月皎こうこう々たるを賞しながら飄ひようぜん然ねぐらと埒らに帰り、互に羽  
 をすり寄せて眠り、朝になると二羽そろつて洞庭の湖水ではちや  
 ぱちやとからだを洗い口を嗽すすぎ、岸に近づく舟をめぐけて飛び立  
 てば、舟子どもから朝食の奉納があり、新婦の竹青は初うい初ういし  
 く恥じらいながら影の形に添う如くいつも傍にあつて何かと優し  
 く世話を焼き、落第書生の魚容も、その半生の不幸をここで一ペ

んに吹き飛ばしたような思いであった。

その日の午後、いまは全く呉王廟の神鳥の一羽になりすまして、往來の舟の帆檣にたわむれ、折から兵士を満載した大舟が通り、仲間の鳥どもは、あれは危いと逃げて、竹青もけたたましく鳴いて警告したのだけれども、魚容の神鳥は何せ自由に飛翔できるのがうれしくてたまらず、得意げにその兵士の舟の上を旋せん回かいしていたら、ひとりのいたずらっ兎この兵士が、ひようと矢を射てあやまたず魚容の胸をつらぬき、石のように落下する間一髪、竹青、稲妻いなずまの如く迅速に飛んで来て魚容の翼を啜くわえ、颯さつと引上げて、呉王廟の廊下に、瀕死ひんしの魚容を寝かせ、涙を流しながら甲斐かい甲斐がいしく介抱かいほうした。けれども、かなりの重傷で、とても助からぬと

見て竹青は、一声悲しく高く鳴いて数百羽の仲間の鳥を集め、羽ばたきの音も物ものすぢ凄く一斉に飛び立つてかの舟を襲い、羽で湖面を煽あおつて大浪を起し忽たちまち舟を顛てんぶく覆させて見事に報ほうしゆう讐し、大鳥群は全湖面を震しんかん撼させるほどの騒然たる凱歌がいかを挙げた。竹青はいそいで魚容の許もとに引返し、その嘴を魚容の頬にすり寄せて、「聞えますか。あの、仲間の凱歌が聞えますか。」と哀あいどう慟して言う。

魚容は傷の苦しさに、もはや息も絶える思いで、見えぬ眼をわずかに開いて、

「竹青。」と小声で呼んだ、と思つたら、ふと眼が醒さめて、気がつくくと自分は人間の、しかも昔のままの貧書生の姿で呉王廟の廊

下に寝ている。斜陽あかあかと目前の楓かえでの林を照らして、そこには数百の鳥が無心に唾々と鳴いて遊んでいる。

「気がつきましたか。」と農夫の身なりをした爺じじいが傍に立っていて笑いながら尋ねる。

「あなたは、どなたです。」

「わしはこの辺の百姓だが、きのうの夕方ここを通ったら、お前さんが死んだように深く眠っていて、眠りながら時々微笑んだりして、わしは、ずいぶん大声を挙げてお前さんと呼んでも一向に眼を醒まささない。肩をつかんでゆすぶっても、ぐたりとしている。家へ帰ってから気になるので、たびたびお前さんの様子を見て来て、眼の醒めるのを待っていたのだ。見れば、顔色もよくない

が、どこか病気か。」

「いいえ、病気ではございません。」不思議におなかも今はちつとも空すいていない。「すみませんでした。」とれいのあやまり癖が出て、坐り直して農夫に叮ていねい嚀にお辞儀をして、「お恥かしい話ですが、」と前置きをしてこの廟の廊下に行倒れるにいたった事情を正直に打明け、重ねて、「すみませんでした。」とお詫びを言った。

農夫は憐あわれに思った様子で、懐ふところから財布さいふを取出しいくらかの金を与え、

「人間万事塞さい翁おうの馬。元気を出して、再拳はかをはかるさ。人生七十年、いろいろさまざまの事がある。人情は翻ほん覆ぶくして洞庭湖の波は

瀾らんに似たり。」と洒落しゃれた事を言つて立ち去る。

魚容はまだ夢の続きを見ているような気持で、呆然ぼうぜんと立つて農夫を見送り、それから振りかえつて楓の梢にむらがる鳥を見上げ、

「竹青！」と叫んだ。一群の鳥が驚いて飛び立ち、ひとしきりやかましく騒いで魚容の頭の上を飛びまわり、それからまつすぐに湖の方へいそいで行つて、それっきり、何の変つた事も無い。

やっぱり、夢だったかなあ、と魚容は悲しげな顔をして首を振り、一つ大きい溜息ためいきをついて、力無く故土に向けて発足する。

故郷の人たちは、魚容が帰つて来ても、格別うれしそうな顔もせず、冷酷の女房は、さつそく伯父の家の庭石の運搬を魚容に命

じ、魚容は汗だくになつて河原から大いなる岩石をいくつも伯父の庭先まで押したり曳ひいたり担かついだりして運び、「貧えんして怨無えんきは難し」とつくづく嘆じ、「朝あしたに竹青の声を聞かば夕ゆうべに死するも可なり矣」と何につけても洞庭一日の幸福な生活が燃えるほど劇はげしく懷慕せられるのである。

伯夷はくいしゆくせい 叔齊おもは旧惡を念おもわず、怨是うらみれを用いて希まれなり。わが魚容

君もまた、君子の道に志している高邁こうまいの書生であるから、不人情の親戚をも努めて憎まず、無学の老妻にも逆わず、ひたすら古書に親しみ、閑雅の清趣を養っていたが、それでも、さすがに身辺の者から受ける蔑視べっしには堪えかねる事があつて、それから三年目の春、またもや女房をぶん殴つて、いまに見ろ、と青雲の志を

抱いだいて家出して試験に応じ、やっぱり見事に落第した。よつぽど出来ない人だったと見える。帰途、また思い出の洞庭湖畔、呉王廟に立ち寄つて、見るものみな懐しく、悲しみもまた千倍して、おいおい声を放つて廟前で泣き、それから懐中のわずかな金を全部はたいて羊肉を買い、それを廟前にばら撒まいて神鳥に供して樹上から降りて肉を啄つむ群鳥を眺めて、この中に竹青もいるのだろ  
うなあ、と思つても、皆一様に真黒で、それこそ雌雄をさえ見わける事が出来ず、

「竹青はどれですか。」と尋ねても振りかえる鳥は一羽も無く、みんなただ無心に肉を拾つてたべている。魚容はそれでも諦められず、

「この中に、竹青がいたら一番あとまで残っておいで。」と、千  
万の思慕の情をこめて言ってみた。そろそろ肉が無くなって、群  
鳥は二羽立ち、五羽立ち、むらむらぱつと大部分飛び立ち、あと  
には三羽、まだ肉を捜して居残り、魚容はそれを見て胸をとどろ  
かせ手に汗を握ったが、肉がもう全く無いと見てぱつと未練みれんげも  
無く、その三羽も飛び立つ。魚容は気抜けの余りくらくら眩暈めまいし  
て、それでも尚なお、この場所から立ち去る事が出来ず、廟の廊下に  
腰をおろして、春霞はるがすみに煙る湖面を眺めてただやたらに溜息を  
つき、「ええ、二度も続けて落第して、何の面目があつておめお  
め故郷に帰られよう。生きて甲斐かひない身の上だ、むかし春秋戦国  
の世にかの屈原くつげんも衆人皆酔い、我独ひとり醒さめたり、と叫んでこの

湖に身を投げて死んだとかいう話を聞いている、乃公おれもこの思い出なつかしい洞庭に身を投げて死ねば、或あるいは竹青がどこかで見ていて涙を流してくれるかも知れない、乃公を本当に愛してくれたのは、あの竹青だけだ、あとは皆、おそろしい我慾の鬼ばかりだった、人間万事塞翁の馬だと三年前にあのお爺じいさんが言つてはげましてくれたけれども、あれは嘘だ、不仕合せに生れついた者は、いつまで経たつても不仕合せのどん底であがいているばかりだ、これすなわち天命を知るといふ事か、あはは、死のう、竹青が泣いてくれたら、それでよい、他には何も望みは無い」と、古聖賢の道を究きわめた筈の魚容も失意の憂愁に堪えかね、今夜はこの湖で死ぬる覚悟。やがて夜になると、輪郭りんかくの滲にじんだ満月が中空に浮

び、洞庭湖はただ白く茫ぼうとして空と水の境が無く、岸の平沙へいさは昼  
 のように明るく柳の枝は湖水の靄もやを含んで重く垂れ、遠くに見え  
 る桃畑ぼんだの万朶あられの花は靄あられに似て、微風が時折、天地の溜息の如く通  
 過し、いかにも静かな春の良夜、これがこの世の見おさめと思え  
 ば涙も袖そでにあまり、どこからともなく夜猿やえんの悲しそうな鳴声が聞  
 えて来て、愁思まさに絶頂に達した時、背後にはたはたと翼の音  
 がして、

「別来、恙つつが無きや。」

振り向いて見ると、月光を浴びて明眸皓齒めいぼうこうし、二十はたちばかりの麗  
 人がにつこり笑っている。

「どなたです、すみません。」とにかく、あやまつた。

「いやよ、」と軽く魚容の肩を打ち、「竹青をお忘れになったの？」

「竹青！」

魚容は仰天して立ち上り、それから少し躊躇ちゆうちよしたが、ええ、ままよ、といきなり美女の細い肩を掻き抱いた。

「離して。いきが、とまるわよ。」と竹青は笑いながら言つて巧みに魚容の腕からのがれ、「あたしは、どこへも行かないわよ。もう、一生あなたのお傍に。」

「たのむ！　そうしておくれ。お前がいないので、乃公は今夜この湖に身を投げて死んでしまふつもりだった。お前は、いつたい、どこにいたのだ。」

「あたしは遠い漢陽に。あなたと別れてからここを立ち退き、いまは漢水の神鳥になっているのです。さつき、この呉王廟にいる昔のお友達があなたのお見えになつてゐる事を知らせにいらして下さつたので、あたしは、漢陽からいそいで飛んで来たのです。」

あなたの好きな竹青が、ちやんとうこうして来たのですから、もう、死ぬなんておそろしい事をお考えになつては、いやよ。ちよつと、あなたも痩せたわねえ。」

「痩せる筈さ。二度も続けて落第しちゃつたんだ。故郷に帰れば、またどんな目に遭うかわからない。つくづくこの世が、いやになつた。」

「あなたは、ご自分の故郷にだけ人生があると思ひ込んでいらつ

しやるから、そんなに苦しくおなりになるのよ。人間いた到るところに青山せいざんがあるとか書生さんたちがよく歌っているじゃありませんか。いちど、あたしと一緒に漢陽の家へいらつしやい。生きているのも、いい事だと、きつとお思になりますから。」

「漢陽は、遠いなあ。」いずれが誘うともなく二人びようならんで廊下から出て月下の湖畔を逍遙しやうようしながら、「父母いまま在せば遠く遊ばず、遊ぶに必ず方有り、というからねえ。」魚容は、もつともらしい顔をして、れいの如くその学徳の片鱗へんりんを示した。

「何をおつしやるの。あなたには、お父さんもお母さんも無いくせに。」

「なんだ、知っているのか。しかし、故郷には父母同様の親戚の

者たちが多勢いる。乃公は何とかして、あの人たちに、乃公の立派に出世した姿をいちど見せてやりたい。あの人たちは昔から乃公をまるで阿呆か何かみたいに思っているのだ。そうだ、漢陽へ行くよりは、これからお前と一緒に故郷に帰り、お前のその綺麗きれいな顔をみんなに見せて、おどろかしてやりたい。ね、そうしようよ。乃公は、故郷の親戚の者たちの前で、いちど、思いきり、大いに威張つてみたいのだ。故郷の者たちに尊敬されるという事は、人間の最高の幸福で、また終極の勝利だ。」

「どうしてそんなに故郷の人たちの思惑ばかり気にするのでしよう。むやみに故郷の人たちの尊敬を得たくて努めている人を、郷き原ようげん というんじやなかったかしら。郷原は徳の賊なりと論語に

書いてあつたわね。」

魚容は、ぎやふんとまいって、やぶれかぶれになり、

「よし、行こう。漢陽に行こう。連れて行つてくれ。逝者<sup>ゆくもの</sup>は斯<sup>かく</sup>の如き夫<sup>かな</sup>、昼夜<sup>す</sup>を捨てず。」てれ隠しに、甚<sup>はなは</sup>だ唐突な詩句<sup>しよう</sup>を誦<sup>し</sup>して、あははは、と自ら<sup>あざけ</sup>を嘲<sup>あざ</sup>つた。

「まいますか。」竹青はいそいそして、「ああ、うれしい。漢陽の家では、あなたをお迎えしようとして、ちゃんと仕度がしてあります。ちよつと、眼をつぶって。」

魚容は言われるままに眼を軽くつぶると、はたはたと翼の音がして、それから何か自分の肩に薄い衣のようなものがかかったと思うと、すつとからだ<sup>が</sup>が軽くなり、眼をひらいたら、すでに二人

は雌雄の鳥、月光を受けて漆黒しつこくの翼は美しく輝き、ちよんちよん平沙を歩いて、啞々と二羽、声をそろえて叫んで、ぱつと飛び立つ。

月下白光三千里の長江ちようこう、洋々と東北方に流れて、魚容は醉えるが如く、流れにしたがつておよそ二ときばかり飛翔して、ようよう夜も明けはなれて遙か前方はるに水の都、漢陽の家々の藁いらかが朝あ靄さもやの底に静かに沈んで眠っているのが見えて来た。近づくにつれて、晴川せいせん歴々たり漢陽の樹、芳草萋々せいせいたり鸚鵡おうむの洲、対岸には黄鶴楼そびの聳そびえるあり、長江をへだてて晴川閣と何事か昔を語り合い、帆影点々といそがしげに江上を往来し、更にすすめば大だ別山いべつざんの高峰眼下ふもとにあり、麓には水漫々の月湖ひろがり、更に北

方には漢水えんえん蜿蜒と天際ほうに流れ、東洋のヴェニス一眸の中に取り、  
「わが郷きょうかん 関いず 何れの処これぞ是なる、煙波江上、人をして愁えしむ」と  
魚容は、うつとり眩いた時、竹青は振りかえって、  
「さあ、もう家へまいりました。」と漢水の小さな孤洲の上で悠然と輪を描きながら言った。魚容も真似して大きく輪を描いて飛びながら、脚下の孤洲を見ると、りよくよう緑楊水にひたり若草けむ烟るが如き一隅にお人形の住家みたいな可憐な美しい楼舎があつて、いましもその家の中から召使いらしき者五、六人、走り出て空を仰ぎ、手を振つて魚容たちを歓迎している様が豆人形のように小さく見えた。竹青は眼で魚容に合図して、翼をすぼめ、一直線にその家めがけて降りて行き、魚容もおくれじと後を追ひ、二羽、そ

の洲の青草原に降り立つたとたん、二人は貴公子と麗人、につきり笑い合つて寄り添い、迎への者に囲まれながらその美しい楼舎にはいった。

竹青に手をひかれて奥の部屋へ行くと、その部屋は暗く、卓上の銀燭は青烟を吐き、垂幕の金糸銀糸は鈍く光つて、寝台には赤い小さな机が置かれ、その上に美酒佳肴がならべられて、数刻前から客を待ち顔である。

「まだ、夜が明けぬのか。」魚容は間の抜けた質問を發した。

「あら、いやだわ。」と竹青は少し顔をあからめて、「暗いほうが、恥かしくなくていいと思つて。」と小声で言つた。

「君子の道は闇然たり、か。」魚容は苦笑して、つまらぬ洒落

を言い、「しかし、いんむか隠に素いて怪を行う、という言葉も古書にある。よろしく窓を開くべしだ。漢陽の春の景色を満喫しよう。」

魚容は、垂幕を排して部屋の窓を押しひらいた。朝の黄金の光が颯さつと射し込み、庭園の桃花は、りょうらん繚乱たり、うぐいすひやくてん鶯の百轉が耳じ朶だをくすぐり、かなたには漢水のさざなみ小波が朝日を受けて躍っている。

「ああ、いい景色だ。くにの女房にも、いちど見せたいなあ。」  
魚容は思わずそう言ってしまった、愕がくぜん然とした。乃公は未だあの醜い女房を愛しているのか、とわが胸に尋ねた。そうして、急になぜだか、泣きたくなつた。

「やつぱり、奥さんの事は、お忘れでないと見える。」竹青は傍

で、しみじみ言い、幽かすかな溜息をもらした。

「いや、そんな事は無い。あれは乃公の学問を一向に敬重せず、よごれ物を洗濯させたり、庭石を運ばせたりしやがって、その上あれは、伯父の妾であつたという評判だ。一つとして、いいところが無いのだ。」

「その、一つとしていいところの無いのが、あなたにとつて尊くなつかしく思われているのじゃないの？ あなたの御心底は、きつと、そうなのよ。惻そくいん隠の心は、どんな人にもあるというじやありませんか。奥さんを憎うらまず怨うらまず呪うらわず、一生涯、労苦をわかち合つて共に暮して行くのが、やっぱり、あなたの本心の理想ではなかつたのかしら。あなたは、すぐにお帰りなさい。」竹青

は、一変して厳肅な顔つきになり、きつぱりと言い放つ。

魚容は大いに狼狽ろうばいして、

「それは、ひどい。あんなに乃公を誘惑して、いまさら帰れとはひどい。郷原だの何だのと言って乃公を攻撃して故郷を捨てさせたのは、お前じゃないか。まるでお前は乃公を、なぶりものにしてているようなものだ。」と抗弁した。

「あたしは神女です。」と竹青は、きらきら光る漢水の流れをまつすぐに見つめたまま、更にきびしい口調で言った。「あなたは、郷試には落第いたしました。神の試験には及第しました。あなたが本当に鳥の身の上を羨望せんぼうしているのかどうか、よく調べてみるように、あたしは呉王廟の神様から内々に言いつけられてい

たのです。禽きんじゆう獣に化して真の幸福を感じずるような人間は、神に最も倦けんえん厭せられます。いちどは、こらしめのため、あなたを弓矢で傷つけて、人間界にかえしてあげましたが、あなたは再び鳥の世界に帰る事を乞いました。神は、こんどはあなたに遠い旅をさせて、さまざまの楽しみを与え、あなたがその快樂に酔い痴しれて全く人間の世界を忘却するかどうか、試みたのです。忘却したら、あなたに与えられる刑罰は、恐しすぎて口に出して言う事さえ出来ないほどのものです。お帰りなさい。あなたは、神の試験には見事に及第なさいました。人間は一生、人間の愛憎の中で苦しまなければならぬものです。のがれ出る事は出来ません。忍んで、努力を積むだけです。学問も結構ですが、やたらに脱俗を

銜てらうのは卑怯です。もつと、むきになつて、この俗世間を愛惜し、愁殺し、一生そこに没頭してみて下さい。神は、そのような人間の姿を一ばん愛しています。ただいま召使いの者たちに、舟の仕度をさせて居ります。あれに乗つて、故郷へまっすぐにお帰りなさい。さようなら。」と言ひ終ると、竹青の姿はもとより、樓舎も庭園も忽こつぜん然と消えて、魚容は川の中の孤洲に呆然と独り立つている。

帆も楫かじも無い丸木舟が一艘そうするすると岸に近寄り、魚容は吸われるようにそれに乗ると、その舟は、飄ひようぜん然ぜんと自行じこうして漢水を下り、長江さかのぼを溯り、洞庭を横切り、魚容の故郷ちかくの漁村の岸畔に突き当り、魚容が上陸すると無人の小舟は、またするすると

おのずか  
自ら引返して行つて洞庭の烟波えんぱの間に没し去つた。

すこぶ  
頗るしよげて、おつかなびつくり、わが家の裏口から薄暗い内  
部を覗くと、

「あら、おかえり。」と艶えんぜん然と笑つて出迎えたのは、ああ、驚  
くべし、竹青ではないか。

「やあ！ 竹青！」

「何をおっしゃるの。あなたは、まあ、どこへいらしていたの？  
あたしはあなたの留守に大病して、ひどい熱を出して、誰もあ  
たしを看病してくれる人がなくて、しみじみあなたが恋いしくな  
つて、あたしが今まであなたを馬鹿にしていたのは本当に間違つ  
た事だったと後悔して、あなたのお帰りを、どんなにお待ちして

いたかわかりません。熱がなかなかさがらなくて、そのうちに全身が紫色に腫<sup>は</sup>れて来て、これもあなたのようないいお方を粗末<sup>そまつ</sup>にした罰で、当然の報いだとあきらめて、もう死ぬのを静かに待っていたら、腫れた皮膚が破れて青い水がどっさり出て、すつとやらだが軽くなり、けさ鏡を覗いてみたら、あたしの顔は、すっかり変って、こんな綺麗な顔になっているので嬉しくて、病気も何も忘れてしまい、寢床から飛び出て、さっそく家の中のお掃除などはじめていたら、あなたのお帰りでしょう？ あたしは、うれしいわ。ゆるしてね。あたしは顔ばかりでなく、からだ全体変わったのよ。それから、心も変わったのよ。あたしは悪かったわ。でも、過去のあたしの悪事は、あの青い水と一緒にみんな流れ出てしま

ったのですから、あなたも昔の事は忘れて、あたしをゆるして、あなたのお傍に一生置いて下さいな。」

一年後に、玉のような美しい男子が生れた。魚容はその子に

「漢産」という名をつけた。その名の由来は最愛の女房にも明さなかつた。神鳥の思い出と共に、それは魚容の胸中の尊い秘密として一生、誰にも語らず、また、れいの御自慢の「君子の道」も以後はいっさい口にせず、ただ黙々と相変らずの貧しいその日暮しを続け、親戚の者たちにはやはり一向に敬せられなかつたが、格別それを気にするふうも無く、極めて平凡な一田夫として俗ぞくじ塵ちんに埋もれた。

自註。これは、創作である。支那のひとたちに読んで

もらいたくなくて書いた。漢訳せられる筈である。



# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成1）年2月28日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：山本奈津恵

2000年9月19日公開

2005年10月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 竹青

——新曲聊齋志異——

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>